世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

〈書評〉長澤昌幸著『一遍仏教と時宗教団』（法藏館、二〇一七年）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古賀, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1539

〈書　評〉長澤昌幸著『一遍仏教と時宗教団』（法藏館、二〇一七年）

古賀克彦

時宗宗学林学頭（当時。二〇二〇年十月現在、大正大学仏教学部仏教学科専任講師）・長澤昌幸著『一遍仏教と時宗教団』（以下、本書と略す）が、老舗版元の法藏館より刊行されたのは二〇一七年十一月である。同書肆は時宗の専門書を上梓する数少ない出版社の一だが、宗門人に限れば、同じく学頭であった歴史学者・橘俊道著『時宗史論考』の一九七五年以来、四十二年振りの出版であろう。

本書には川村覚昭による書評[1]があり、また、『月刊住職』二〇一八年正月号（興山舎）の新刊レヴューや『浄土学』五五輯（浄土学研究会、二〇一八年）でも紹介されている。そして、本書と同じ版元から、長谷川匡俊著『近世浄土宗・時宗檀林史の研究』（以下、長谷川著作と略す）が二〇二〇年四月に発刊され、本書にも言及している。

近年、一遍や時衆・時宗教団について、歴史学者からの視点で書かれた本は一定数出版されているが、教学を前面に押し出した書物は稀少である。以下に主要目次を掲げ、本書刊行の意義を概観したい。

序　章　本書の目的と構成

第一章　一遍教学の形成

第一節　證空教学から一遍教学へ

第二節　一向俊聖の念仏思想
第三節　一遍教学における「このとき」攷
第四節　時宗宗学における念仏往生観
第五節　門流による一遍呼称の変遷
第六節　一遍教学とその展開
第七節　誓願寺所蔵　伝一遍著作に関する一試論
第二章　時宗宗学の基底
第一節　時宗宗学に関する一試論
第二節　明治期時宗教団の子弟教育
第三節　時宗宗学における仏説
第四節　一遍の偈頌
第三章　時宗宗学と儀礼の接点
第一節　臨終の儀礼と遊行寺歳末別時念仏会
第二節　時衆教団における入門儀礼考
第三節　時衆教団と密教修法
第四節　近世時宗教団における伝法成立
史料翻刻　誓願寺所蔵『西山上人所持』
結　章　総括と今後の課題

以上から判明するように、まず一遍の思想形成を思想背景から探り、一遍が臨終に際して著作や法語類を焼

却したため、それらが存在しない中で宗学が形成されてきた実情をふまえ、中世から近世・近代における歴史的な展開を概観し、時宗宗学と儀礼が、どう捉えられていたのかについて検討している（本書序章）。特に、従来余り考察されていなかった近世・近代の「時宗教団」の様相を深く掘り下げている点に注目したい。なお、目次の中で「時衆」と「時宗」が混在しているが、基本的に中世は「時衆」、近世以降は「時宗」と使い分けているようである。では、以下に本書の内容を見ていこう。

「時宗」と言っても宗祖は一遍だけではない。第一章の早くも第二節に一向俊聖を取り挙げているように、広く目配りしなければならない。そして、證空や西山派寺院所蔵史料を分析している。嘗て、梅谷繁樹著『捨聖・一遍上人』（講談社、一九九五年）が刊行された際、新書版でありながら難解な西山教学への言及が多いことに驚いたが、本書も西山義への目配せも忘れていない。第一章第一節の表題に表れているが、一遍の著作が遺されていない以上、一遍が学んできた教義である證空教学をまず原点にすべきである。前掲の川村覚昭書評では、一遍をソクラテスに準えているが、その場合、プラトンは遊行を継承した他阿弥陀仏（真教）に比定されるのであろうか。恰も、孔子に著作がないため、言行録たる『論語』よりも孔子の学んだ六経（りくけい）を重んじた荻生徂徠に倣うかの如く、著者は一遍思想の源流を辿っている。本書の特長は、一遍・一向の思想を遡行しつつ、後代への影響について視野を広くとりながら考察している点にある。

第一章第五節は、興味深い論考である。宗祖を何と称するか、とは重要な問題ではあるが、あまり語られて来なかった主題であろう。著者の史料博捜に感嘆する。

第三章第三節では、浄土教と密教との接点について考察するが、もう少し教理面を掘り下げるべきではなかったか。儀式面での実際として南北朝期に活躍した中原師守の日記である『師守記』を採り上げているが、代々外記職を世襲する中原氏では、室町中期には日記『康富記』で知られる中原康富が出ており、嫡流後裔で

ある押小路家に関する論稿もある。[2]

さて、当方最大の関心は、「近世・近代における時宗教団の寺門教育」である。[3]第二章第一節と第二章第二節で、特に後者は「書き下ろし」であり、本書の眼目である。第三章第四節にも近世学寮の記述がある。

まず、第二章第一節では、末尾に付録として横組みの表「席講典籍一覧」が載っている。初出時には縦組みであった。横組みの方が遥かに見やすい。更に初出では五十四名、今回は五十五名である。異同を見ると三十九番に「寂元」なる者が追加挿入されている。これだけでも出版した価値がある。惜しむらくは全ての項目に西暦も併記して貰いたかった。何となれば、何年かかって出世するのかを判別する為である。

続く第二章第二節には、長谷川著作の付録と同じ「学寮条目」が掲載されているが、第三章第四節にも一部が引用され重複している。資料は長谷川著作のように、巻末に纏めた方が良いと思われる。本書では時宗宗典編集委員会[編集]『定本時宗宗典』(時宗宗務所、一九七九年)を典拠とするが、誤植がそのままであったり(例えば「脉」を「賑」とする)、改行されていない箇所や脱字、衍字が散見され惜しまれる。同史料については、第三章第二節の註で引用している高野修「時衆教団にみる制戒について」[4]にも収録されており、こちらの用字は「脉」である。この高野論文冒頭で「時衆に関わる制規については『定本時宗宗典』にそのほとんどが収録されている。ただし江戸時代の制戒については、雑誌『時衆研究』三十一・三十五各号に大橋俊雄氏によって紹介されたものを、そのまま転載されたものであり、その後の調査によって補充する必要が生じた」と述べている。今更ではあるが、宗門教学当局は、速やかに厳密な校訂を施すべきであったし、本書も史料引用にあたっては、慎重であるべきだった。

索引には「檀林」が七箇所挙げられているが(管見では、少なくとも更に一六一・一六二頁の二箇所追加できる。「准檀林」は文中に複数出るが、立項されていない)、殆どが浄土宗の檀林である。時宗に関しては「檀

林クラス」との用語も見られるが（一三八頁）、特に定義がなされている訳ではない。長谷川著作にも言えるが、時宗の「檀林」は近代以降の用語であり[5]近世の記述では不適当と思われる。また、十日町来迎寺は「准檀林」と称されたといわれており[6]、その定義や調査も必要である。

次に、『大衆帳』の更なる分析も課題である。本書では詳細な作表に敬意を表するが、例えば個々の学僧履歴を他の史料と照合する作業[7]も必要であろう。

近代時宗の教育については、「大悲学校」等の児童教育施設についても考察を深める必要がある。近世の寺子屋を淵源とするこれら施設については、各地に残る「筆子塚」の研究を通しても考究される[8]。

最後に、本書は遊行派中心の記述であり、僅かに一向派にも触れているが不十分である。長谷川著作では四条派についても考察しており、他派の史料発掘が望まれる[9]。

そのような僅かな瑕疵を論（あげつら）ったが、版元の惹句にある通り「類書希少な時宗教学書」である。重版したとも聞く。未読の方は是非お読みいただきたい。

註

（1）『日本仏教教育学研究』二十七号、日本仏教教育学会、二〇一九年。

（2）的場匠平「近世公家社会における葬祭と寺院」（『蓮花寺佛教研究所紀要』八号、二〇一五年）で中原氏押小路家の菩提所霊山正法寺との関係に言及し、同「中近世移行期貴族層における寺院・墓地・檀家の関係について」（『年報 三田中世史研究』十九号、二〇一二年）では、山科家の『言継・言経・言緒卿記』について考察している。

（3）拙稿「近世・近代における時宗教団の寺門教育」（『日本仏教教育学研究』十号、二〇〇二年。但し「鑑」が「艦」となる等、誤植が多い。二〇〇一年十一月二十四日、当時の武蔵野女子大学で行われた日本仏教教育学会第十回大会での報告を成文化）。

（4）『藤沢市文書館紀要』五号、一九八二年。
（5）『時衆年表』一八九〇年二月二十日条「兵庫真光寺を檀林に昇格せしめ山形光明寺を四等寺に革定す」。本書も引用の『時宗令規集』二（時宗教学研究所［編］、時宗宗務所、二〇一三年。一四頁等）に照らすと、他にも「大檀林補処地一蓮寺」等の記載が見られる。
（6）時宗教学研究所［編集・発行］『時宗寺院明細帳』二、二〇〇二年。『来迎寺略縁起』小林賢有、一九九六年。
（7）例えば、拙稿「〔史料翻刻〕時宗七条道場金光寺旧蔵『御綸旨参内控集』」（『社寺史料研究』五・六号、同会、二〇〇三・二〇〇四年）等との照合も可能である。
（8）『時衆年表』一八八八年三月条「真光寺河野往阿寺内に大悲学校を開創し近隣の児童を教育す」。近世では、国立歴史民俗博物館［編］『筆子塚資料集成』（二〇〇一年）等も参考になろう。
（9）例えば、拙稿「【史料翻刻】時宗四条派本末関係書類」（『時衆文化』二号、二〇〇〇年）でも四条派の史料を発掘している。

（武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員、国府台女子学院高等部教諭）